

日本植物 生理学会 通信

No. 154
2025.7.1

THE JAPANESE SOCIETY OF PLANT PHYSIOLOGISTS

一般社団法人 日本植物生理学会
〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入西大路町146 番地
Tel: 075-415-3661 Fax: 075-415-3662
E-mail: jspp@nacos.com https://jspp.org/

会長挨拶	1
学会記事	2
PCPニュース	4
PCPサロン	7
広報委員会だより	11
国際委員会より	13
男女共同参画委員会より	15
世界の研究室から—第27便—	17
研三先生を偲んで	21
第67回日本植物生理学会年会のお知らせ(第1回)	25
第66回日本植物生理学会年会の報告	27
Japan-Taiwan Plant Biology 2026 (JTPB2026) の 開催案内	34
一般社団法人日本植物生理学会2025年度代議員会議事録	35
1. 議事録	
2. 資料(庶務関連事業報告・事業計画)	
1) 2024年度事業報告	
2) 2025年度事業計画	
3) 2024年 決算書	
4) 2025年 予算書	
2026年度日本植物生理学会賞・奨励賞の募集について	49
学術集会案内	50
研究助成・賞・その他公募	51
求人	53

JSPP

特別寄稿 先人の労苦を偲んで

東京大学名誉教授、吉田生物研究所研究顧問 田澤 仁（元植物生理学会会長）



2025年2月、京都市山科区吉田生物研究所実験室にて

編集局からPCPサロンへの寄稿を依頼されたとき、なんとなく気が進まなかった。その理由はおそらく次のような事情によるのではないかと思う。私は本年1月12日に九十五歳になった。周囲を見れば私より年長の知人はもとより、私と同年配の友人の多くは鬼籍に入っておられる。私より年少の方も少なからず亡くなられておられる。昔、私より4歳年長の古谷雅樹さんが、八十代の終わりごろだと思うが「気が付いたら周囲に知っている人がいないんだよ」と嘆かれたのを思い出す。植物生理学会、PCPの発展に尽くされた先人が居られなくなって私一人取り残されている侘しい状態が、なんとなく筆を執る気を重くしているのだと思う。しかし、昔の学会、PCPを巡る当時のことを見聞している生き残りの一人として、今日の学会の隆盛の礎を築かれた先人の労苦を偲ぶのも、大切なことではないかと考え、一文を草してみた。テーマは一つは学会誌名について、もう一つはPCP編集についてである。

I 学会誌名はどのようにして決まったのか

学会誌 Plant and Cell Physiology はピーシーピーと略称で呼ぶのが常である。このリズムカルな略称の元は Plant and Cell Physiology の and Cell があるおかげである。and Cell については学会通信第76号で「日本植物生理学会40周年をむかえて」と題して40周年記念号の編集責任者の増田芳雄さんが詳しく述べておられる。それを紹介しよう。

「これについては、私が昨年秋、この40周年記念事業について

第4代会長神谷宣郎先生とお話ししたことをここで紹介しておきたい。実は神谷先生には40周年のためにご寄稿をお願いしたのであったが、その時すでにご病状が進み、とても原稿は書けないので、思い出したことを話します、と仰られ、その内容を私が公にしてもよい、というご了承を得ていた、……」

増田さんによる神谷先生のお話のうち、このPCPの「and Cell」に関する部分は次のとおりである。

「久世源太郎先生と太田行人先生の“おぼろげな”ご記憶として私が伺ったところによると、創設の前年の1958年秋、たぶん植物学会大会の折、植物生理学会創設のため20～30人の研究者が京都大学楽友会館に召集され、ここで学会が事実上呱呱の声をあげた。ここで機関誌名、すなわち“Plant and Cell Physiology”はもとより、その表紙のデザインまでもが用意されていて、出席者に示された、とのことである。実は、これより前、芦田先生の部屋に田宮博、高宮篤、神谷宣郎、森健志、今村駿一郎の諸先生が集まり、下相談がなされたということも伺った。もっとも、田宮博先生の「Plant and Cell Physiology 発刊の頃の回顧」（日本植物生理学会通信第15、9-14、1973）によると、発会が宣せられたのは1959年4月4日、本郷赤門の学士会館であったが、それまでの田宮先生の相談仲間は芦田譲治、高宮篤、柳田友道、神谷宣郎の諸先生であった、とある。これらの相談がいつ頃何処でなされたかについては田宮先生は書いておられない。したがって、相談が芦田先生のお部屋で行われた可能性は高いのではないか。細かいいきさつ、時間、場所は今となってははっきりしない。なお、田宮先生はこの回顧で、この「and Cell」を Plant と Physiology の間に入れる雑誌名の案は高宮先生から出たと書いておられるが、実はこの案は神谷先生が出されたのが真相である。これについては神谷先生も学会通信第18号（1976）に書いておられるが、なお念を押しておかれたかったようである。このことはのちに、神谷先生に田宮先生からこの誤記についてお断りの手紙が届いたそうである。私は以前も同様のことを耳にしていたが、今回神谷先生から再び直接伺い、40周年の機会にこの事実を会員の皆さんに更に明らかにしたいと考え、神谷先生のご了承を得たので、ここに報告したい。」

神谷研出身の私は先生が亡くなられてから（1999年1月10日逝去）大分経ったある日、宝塚にあった先生の旧宅を訪ね、書架に年代順に整理されていた書類に目を通した。そして1994年44番目の資料「恩師 篠遠喜人先生」を見つけた。短いので全文を紹介する。この文章が書かれたのは神谷先生の81歳の時である。

「恩師 篠遠喜人先生：今から丁度 60 年前（筆者注 1935 年、神谷 21 歳）、私は東大理学部植物学科の中期生（2 年生）でそろそろ卒業論文のことを考えねばならないときであった。生きた細胞の動的な営みをできるだけ物理と化学の言葉で理解できるような研究をすることが高校時代からの夢であったが、それは大学に入ってから変わっていない。篠遠先生が大変リベラルな方であることはすでに知らされていたので、私は自分の今後の進路についてまず先生のご意見を伺いたいと思い、恐る恐る先生の部屋のドアをノックした。先生は私の言うことを黙って聞いてくださったが、しばらくして「それはこれからの生物学にとって大変重要なことだと思います。私には指導できませんが君自身の努力で新しい道を拓いてください」と言われてこの生意気な学生を励ましてくださった。こうして私はいわば異分子として篠遠研究室に入れていただいたわけだが、先生はいつも温かいまなざしで私のすることなすことを見守ってくed くださった。」

「生きた細胞の動的な営みをできるだけ物理と化学の言葉で理解できるような研究をする」という神谷先生の夢は粘菌やシャジク藻の原形質流動の研究に開花結実する。神谷先生の頭の中には絶えず細胞が入っていたので、植物生理学会の欧文誌名の時にも Cell が自然に出てきたのだろう。

おなじ学会通信 76 号に会長浅田浩二さんは「日本植物生理学会創立 40 周年—これまでとこれから」と題する論説の中で「Plant and Cell Physiology の刊行」という見出しを設け、

「誌名については世話人会で神谷宣郎先生の提案された Plant and Cell Physiology が採用され、これによって個体生理だけでなく細胞生理、細胞以下の レベルの植物科学をもふくめることが示されました。最近になって Cell を誌名に入れた植物科学の Journal がいくつか創刊されてきましたが（Plant Cell, Plant Cell Environ.）、40 年前に Cell の入った誌名をもつ植物生理学、植物科学の Journal はなく、当時、国際的にも新鮮な感じを与え、PCP の誌名は植物科学の発展の方向を見越した卓見であったことを示しています。」

と、誌名の先駆性を強調しておられる。

II 学会創立及び学会誌刊行を巡る先駆者たち

この学会通信〈創立 40 周年記念特集〉には、学会および PCP の歴史上看過できない多くの論説が載っているが、私はそのうちの三つに注目したい。長谷栄二先生の「日本植物生理学会創設の前後」、宮地重遠さんの「PCP 初期の思い出」、滝本敦さんの「PCP 苦難の時期」である。これらの論説を直接引用することで、学会及び学会誌を巡る先駆者の労苦と功績を偲びたい。

1. 長谷栄二：「日本植物生理学会創設の前後」より

長谷先生のこの論説を読むと、学会創設の運動を推進されたの

は東京大学教授田宮博先生であることがよくわかる。

「田宮先生は 1935 年の第 6 回国際植物学会に出席された当時から植物生理学の会を日本にも持ちたいと思うようになられた。……1954 年パリで開かれた第 8 回国際植物学会で International Association of Plant Physiology (IAPP) の設立の準備会が持たれ、これが動機でフランスやインドではそれぞれの国の植物生理学会が創設されるという情報が入ると、田宮先生はいよいよ日本で行動を起こすことを決意された。」苦勞したのは設立に必要な資金である。「アジア財団という財団の所長であった Dr. R.B. Gallery の肝いりで、ある程度のまとまった寄付金が入り、1959 年 4 月学会発足となった。」「学会誌 Plant and Cell Physiology の発刊については当初東京大学応用微生物学研究所にいた服部明彦、宮地重遠の両氏が主となってあたられ種々に苦勞されたことを覚えている。」また「田宮先生は投稿論文の内容、英語表現の改善についてひとかたならぬ苦勞をされた。」

田宮先生の見先性、指導力、献身的寄与には頭が下がる。

2. 宮地重遠：「PCP 初期の思い出」より

長谷先生の記されたように初期の PCP 編集の一切は田宮博先生の勤務する東大の応用微生物学研究所（応徴研）で行われた。その当事者の宮地さんに当時の状況を語ってもらおう。

「ある時、田宮先生から当時東大の応用微生物学研究所にいた、服部明彦先生と私に電話で、「植物生理学会という学会が発足し、欧文誌を出すから、その編集をやるように」という御命令があった。それから欧文誌の原稿募集から編集、発行に至る苦闘が始まった。すべて、暗中模索、見よう見まねで、やっと Plant and Cell Physiology (PCP) の Vol. 1, No. 1 のゲラができて、田宮先生にお見せしたところ、「英文がなっていない。」「君達 は running title はどうあるべきか分かっていない。」などなど、きついお叱りをうけ、作り直したことを記憶している。」

今の若い会員には〈田宮先生のご命令〉という表現がピンとこないかも知れない。田宮教授は大変こわいボスで、自分の気に入らなければ殴る癖があった。当時すでに講師であった宮地さんにとっても、先生のご依頼はご命令なのである。筆者が神谷宣郎先生から直接聞いたことだが、戦後間もない頃、東大植物学教室の廊下で田宮教授と会った時、教授は神谷講師に「お前、徳研へ来い、来なかったらぶんなぐるぞ」と云ったそうである。徳研とは田宮教授が 1946 年から東大と兼任で所長を務めた、徳川義親侯爵設立の私立の徳川生物学研究所で、東京の目白にあった。先生は徳研に優秀な研究者を招き寄せ、その研究をサポートして成果を上げさせ、徳研の名を揚げようという意図があったのだろう。徳研の所長になられたばかりの田宮先生としては当然のことだろう。

「そのうち、東大応徴研の主な働き手は、藤田善彦さんと私に移っていたように思う（と書いても、当時東大応徴研 7 研にお

られた方々の献身的なご協力を忘れてしまったわけではありません。」そのうちに「気がついてみたら、外国会員からの会費受付だけでなく国内会員の会費受付、会計などの事務も私共がやるはめになっていた。但し雑誌の発行部数は今のようになく、応微研で袋づめにし、リヤカーに積み込んで、我々が本郷郵便局に運んでいった。……要するに応微研における家内工業的な努力で、当時の日本植物生理学会と PCP の運営のかなりの部分が支えられていたと記憶する。」

要するに初期の PCP 刊行は、田宮先生はじめ門下生の献身的な努力なしには成り立たなかったであろう。

3. 滝本敦：「PCP 苦難の時期」より

初めに滝本さんは PCP 刊行の状況を次のように的確にまとめておられる。

「PCP は 1960 年の創刊以来、東京大学の故田宮博教授一門のグループに支えられて、当時としては珍しい国際的な学術誌へと進展していった。私は創刊当時の事情をあまりよく知らないが、当初は長谷榮二教授を中心として服部明彦、宮地重遠、藤田善彦氏らが東京大学応用微生物学研究所で PCP の編集をされていた。ところが 1967 年のある日突然、当時植物生理学会会長になられたばかりの高宮篤先生が前会長の芦田譲治先生（京大）のところに來られた。そして芦田先生から私のところへ電話があり、すぐに部屋に来てほしいとのことであった。それはすでに夕方に近い時刻であったと記憶している。」なにごとならんと「芦田先生の部屋に行って驚いた。芦田、高宮両先生が私に PCP の編集をしてほしいと言われたのである。詳しい事情は分からないが、永年編集業務にたずさわってこられた方々がくたびれ果てて、新しく植物生理学会長になられた高宮先生に編集室をどこかへ移してほしいと申し入れられたらしい。高宮先生はそれを承諾され、名古屋大学へ行って太田行人先生に編集を依頼された。しかし、これまた詳しい事情は知る由もないが、太田先生が固辞されたいし、高宮先生は困り果ててその足で京大に來られたのである。」「なぜ私に白羽の矢が立てられたのか？ 理由は簡単なことであった。私は恩師の今村駿一郎先生が定年退官されるのを期に今村一門の研究者が行っていたアサガオの花芽形成に関する研究をまとめたモノグラフ “Physiology of Flowering in *Pharbitis nil*” をつくり、PCP の別冊という形で出版していただいた。この本は今村先生が編集者とされているが、実質的には私が編集したことをお二人の先生方はよく知っておられた。今村先生からの情報であったと思われる。とに角、その本がよくできているからお前ならば PCP の編集もできるはずだと言うのである。これには困ってしまった。私は当時まだ 40 才を過ぎたばかりの若者であり、英語にはまったく自信がなかった。ではなぜアサガオ開花生理のモノグラフを編集することができたのか。これまた理由は簡単である。当時、アメリカその他外国から来日して京都を訪れる研究者が多く、私たちの研究者仲間も次々と京都にやって來

られた。私はそれらの人々に観光その他精一杯のサービスをし、その見返りに (?) 英文校閲を依頼したのである。当時は円をドルに換えることが難しく、外国人にはそれ以外の方法で謝礼することは難しかったのである。」

「私は高宮先生に、とても PCP の編集はできないとお断りしたが、高宮先生は「君だったらできるはずだ。私はこのままでは東京に帰ることはできない」と言われ、なかなか引き下がってくださらなかった。よほどきびしい要求を受けてこられたものと推察される。私は窮余の策として、私が書く英文はもちろんのこと PCP に受理された論文の英語をすべて校閲してくださる英語常用国人が近くにいらっしゃれば、お引き受けしてもよいと言ってしまった。すると、芦田先生が即座に「いい人がある。これからすぐにお願ひに行こう」と言って、私を山田康之夫妻の家に連れていかれた。山田先生は当時アメリカの人と結婚されたばかりで山田夫人は化学を専攻された人でもあったため、山田夫人に私の援助をするよう頼まれたのである。それは夕方のことでもう外は暗くなっていたように記憶する。山田夫妻は芦田先生の頼みとあつては断ることができなかったであろう。結局は快く引き受けてくださることになった。」

「ここまできるともう断れない。任期は 3 年とすること、PCP 編集室を京都に移すこと、印刷も京都で行うこと、英文校閲費を学会が負担すること、それまでなかった編集長を設けることなど、基本的なことを決めた上で高宮先生は東京に帰られた。わずか数時間の、それも突然の出来事であった。」

この数時間の間の三者の間に繰り広げられたやり取りは、さながら一幕のドラマを見るような気がする。さらに、短時間のうちに滝本さんが編集を引き受けるにあたって高宮会長に出した編集の基本骨格にも感心する。アサガオ研究のモノグラフを出した時の編集経験があったからであろう。

「幸いなことに、山田夫人は誠意をもって英文の校閲をして下さったし、当時は英文校閲費をすべて学会が負担したため著者からの苦情もなく、英語だけはそこそこの論文を掲載することができたのではないかと考えている。」また「この時から現在学会事務室のある中西印刷に PCP の印刷をお願いすることになり、私と同じ研究室の中村信一氏の献身的な援助に支えられて、PCP の編集をそれなりに行えるようになった。」

ここで、PCP 印刷を中西印刷株式会社でするようになった経緯を、現社長の中西秀彦氏に聞いたので紹介する。

「私の父（中西亮氏）から聞いた話です。1960 年代後半のことと思います。当時瀧本先生は、PCP を本格的に世界に通用する学会誌にされたかったようです。ただ、当時は活版の時代で、日本での欧文活版組版は世界水準にはるかに劣っていました。といいますのも、日本語は全角はすべて同じ大きさで、単語が行間で割れても問題ありません。ところが、欧文の場合は m と i で幅が違い、しかも、行末が揃わなければなりませんし、

単語も基本的に行間で割れません。こうした欧文組版規則を守った組版は相当に熟練した植字職人でないとできません。日本には欧文の需要が少ないこともあり、本格的な欧文組版ができる職人はほとんどいませんでした。中西印刷は当時、業界にさきがけて、イギリスから輸入したモノタイプという機械を導入していました。これは欧文特有の行末処理や単語処理が自動のできる機械です。これで組版すると、もともとがイギリス製ですから、欧米と同品質の誌面ができます。滝本先生はこの品質を見て、中西への発注を決められたとのことでした。」

PCP 編集が軌道に乗り、編集長の滝本さんは安堵したことだろう。ところが滝本丸は次の難所に差し掛かる。

「間もなく大変な不幸が訪れた。あの学園紛争である。まず、学会の仕事は公務ではないから研究室で大学の教官や事務員を使って学会の仕事をするのはよろしくないと言うのである。これは全国的なことであって、その頃から学会事務は次々と学外に移されるようになった。更に悲劇は続いた。私のいた京大農学部は学生によって、バリケート封鎖され、3ヶ月間にわたって教授は建物の中に入ることができなくなったのである。私はやむを得ず編集室を小さな自宅に移し、自宅ですべての編集業務を行うことにした。」「私は当時教室主任をしていたため、大学に入れない私達は連日市内某所で教室主任会議、教授会を繰り返し、夜は編集業務に追われたのである。研究は全くできない時期であった。この時期が一番苦しかった時代であり、PCP にとっても最大の危機であったと思う。」

PCP 編集という大仕事を独りで抱えて自宅で懸命に作業する滝本さんの姿を想像すると、自ずと頭が垂れ下がる思いがする。

滝本さんの論説は次の文章で終わる。

「封鎖が解除されてからは再び教室で公務の妨げにならないことを気遣いながら編集業務を行い、なんとか3年間の任期中編集を続けることができた。援助してくださった方々に厚くお礼申し上げたい。任期終了後は増田芳雄先生が編集を引き受けてくださることになり、PCP の編集は順調に行われるようになった。」

滝本さんの安堵した顔が浮かんで来る。“PCP にとっての最大の危機”を乗り切って下さった滝本さんに「ご苦労さん。ありがとうございます。」と申したい。

さて、会員の皆様、この長い記事をお読みになってどんな感想をお持ちでしょうか。本記の内容はPCP 編集に献身された方々の体験記をもとに綴りました。書くにつれて本誌に登場する方々の往時を偲び、感慨を深めました。そして筆者の発表論文の30%を掲載していただいた、筆者にとって文字通り My Journal である PCP を今日の隆盛に導く基礎を築かれた先人の方々に深甚の謝意を表したい。

【謝辞】 本学会会員で、京大の滝本敦先生門下生の貝原純子さんに種々助言をいただいた。厚くお礼もうしあげる。元会長三村徹郎さんは原稿をお読みくださり、文章構成上のご意見をいただいた。感謝申し上げます。学会誌 PCP の印刷を中西印刷株式会社に委託するようになった経緯をご教示いただいた中西秀彦社長と社長談話をお世話いただいた学会事務担当森川佳奈さん（2025 年退職）に謝意を表します。